

鹿大の チカラ

法文学部

社会運動研究 平井一臣 教授(51)



「政治学と歴史学、その両方に足をつっこんでいる」。平井一臣教授は政治学は自らの研究をそう表現する。

その訳は原題の「地域ファシズム研究」にある。

1978年に九州大学法学部に入學し、政治専攻を選んだ。入ったゼミのテーマは「ファシズム」だった。折しも「戦時中の日本は果たしてファシズムだっ

たのか」という日本ファシズム論争が盛んなところ。ゼミでは中央の論争を横目に、ドイツやイタリアなど各国のファシズムの違いを比較した。

82年に修士課程に進み、30年

代の福岡の地域社会運動について研究した。当時の機関誌やビデオ、新聞記事をめぐり、生存している関係者から聞き取りをして、当時の運動の様子を再構成した。「政治や社会運動の流れを歴史的にといえる面白さがあった」

政治、若者の感性で

現在の研究テーマは戦後の社会運動のシンボルにもなった。今、当時の資料を段ボール10箱分ほど預かって検証中だ。

「戦後日本の社会運動の流れを地域から見たらどのように見えるかを研究したい」。どうしこも情報が集中している首都圏・関西地方の研究機関を中心として、「個がある」という大きな枠組みで政治や社会を考えていたところである。

「いつでも、それは頭でつかむ。わゆる教科書的な流れからは見えてこない、見落とされた問題現代はもっとパーソナルな部分

金運動の問題だ。60年代のベトナム反戦運動が地域レベルでどのように繰り広げられたのか、なぜその地域で起こったのか。日韓関係にも幅を広げる。

県内の住民運動も研究対象だ。70年代に起きた志布志湾の海岸線を埋め立てて工業用地を造成する「新大陸開発計画」に反対した住民運動。全国の反公害運動のシンボルにもなった。

今、当時の資料を段ボール10箱分ほど預かって検証中だ。なぜ、今政治について考える必要があるのか。そんな問いかけを若い世代にすることに苦労しているといふ。

「いつでも、それは頭でつかむ。わゆる教科書的な流れからは見えてこない、見落とされた問題現代はもっとパーソナルな部分

を地域レベルで再構成したい」

一方、大学では社会運動について学生に教えることが難しくなっているという。社会運動は

リーマンショックを発端とす

る経済不況が続いている現代の日本社会を見ていると、個人的な努力が急増している現代の日本社会を見てみると、個個人的努力でどうにもならないことがたくさんあると感じている。「それ

が政治や社会のつながりで克服しないといけない。今の若者の感性で政治をとらえてほしい」といふ。

「いつでも、それは頭でつかむ。わゆる教科書的な流れからは見えてこない、見落とされた問題現代はもっとパーソナルな部分